

飛砂防止工法について

植生コンサルタント

日本植生株式会社

人工芝植生帯工法

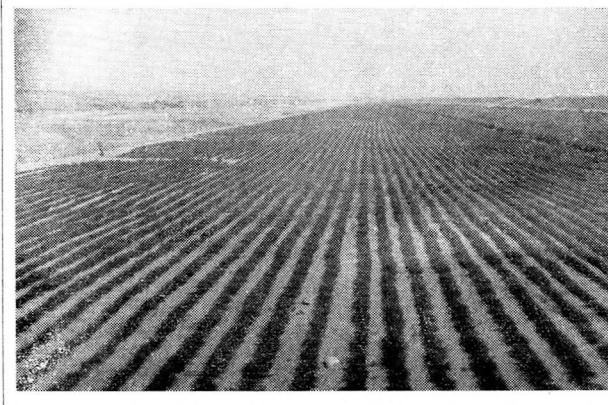
本工法は、第二報で記載した植生盤工法の多年に亘る実績に基づき、植生盤工法の問題点であったものを製品化によって施工の簡易化、種子の流失防止、施工時期の制約を排除し、かつ植生盤工法と同一効果をねらったもので、全国各地に施工実施の結果、確実なる実績を上げている。全国的な労働力の不足は、土木事業推進上大きな支障を来たし、野芝は不足の一途をたどり、入手困難を極めるなどの点を解決するため、人工的な植生芝を活用して急速緑化を図ったものである。

植生帯工法は、植生帯の規格品を現地に運び、直ちにのり面に張りつける工法であるから、従来の工法に比べて極めて簡単、確実、迅速しかも安価に大量の緑地を急速に造成することを特徴とする新しい工法である。植生帯は長さ一桁の円筒状のもので、Ⅰ号、Ⅱ号、Ⅲ号の三種あり、Ⅰ号は、直径三センチ、重さ五十グラム、Ⅱ号は直径三センチ、重さ一〇〇グラム、Ⅲ号は直径三センチ、重さ一五〇グラムの網目を有する袋体の中に土壌培養基材、化学肥料、有機質微量元素その他の必要物質、及び種子を格納したものである。植生の種子は、施工目的及び切取の

植生帯



飛砂防止



施工方法は、のり面に等高線に深さ三センチの溝を、間隔三〇〜四〇センチで連続して切りつけ、植生帯を植溝に挿入し、約五〇センチ間隔に目串で止め、表面が露出せぬ程度に覆土して出来上るもので、盛土のり面、または土壌条件の良好な切取のり面を対象としたものである。施工後は適当な水分と温

り面、盛土、手拓、平坦地、治山用の立地条件によるもののほか、対暑、対寒、対温、対瘠悪地等に対する植生の特性を充分研究の上、あらゆる立地、気象条件に適應する植生を導入しており、全国各地の土壌条件、気象条件が異っていても施工が可能である。

度により、一〜二ヵ月後には、みことな芝におおわれた斜面が誕生して、のり面保護、土壌保全の役割をはたす。

飛砂防止工法

海岸地帯に点在する砂地は、風によって絶えず砂が移動飛散して、付近の宅地や工

場は、不衛生を極めている。そこで植生を導入して、飛砂による風蝕を防止することは、美観並びに衛生上極めて重要である。この目的を達成するため、大学の研究所とタイアップして本格的に取り組み、各所で実績をあげ、好評を博している。従来推移や静砂垣を併用した砂防造林が行なわれて来たが、かなり長年月を要する欠点があった。本工法は砂の表面処理をすることにより砂の移動を防止し植生を導入、短期間に砂地表面を緑化することである。砂地に植生を導入する要点として、砂地の移動防止、保水を良好にする、夏期の乾燥をさける。風潮の害に注意する。養分不足による植生の老衰化防止対策、砂地に適する植生を導入する等が大切である。

施工法については、多くの方法があるが代表的なものは、実播工法、粉体投入工法、肥土投入工法の三種があり、各種の条件により、どの工法で行なうかは、条件を検討して最も良い方法で施工されている。

施工上の注意事項としては、客土に使用する土壌のpHを調査し、肥沃な土壌をつくる。この場合、種子と他の基材を混和攪拌し植生溝に投入する。溝を切る場合、深淺のないよう注意し、覆土は厚薄があると発芽の不振をまねく。表面処理剤を使用する水は、清水を使用し、散布後速かに被覆層が形成され、風蝕の発生を防止する。

この間、種子は地下水を吸収し、発芽を良好にする。発芽生育した草生は、飛砂を防止し、緑化によって有用飼料化を図ることが出来る。